

ブラジルにルーツを持つ幼児の 2言語による語彙発達評価の試み

Language Assessment of Nursery School Children with Japanese-Brazilian Heritage Based on
Vocabulary Tests in Two Languages

権藤 桂子
Keiko GONDO

1. はじめに

近年、保育所には外国にルーツをもつ子どもが増加しており、それらの子どもたちの家族の出身国や母語も多様化している (e-Stat, 2020)。その多くは、家庭での母語 (継承語)¹と日本語の2言語環境で育っているため、外国にルーツをもつ子どもたちの保育者や支援者は子どもや家庭とのコミュニケーションの難しさを抱えている。支援にあたっては、2言語環境で育っている幼児の言葉の発達を捉えることが難しく、保育や子育て支援の場の課題の1つである。

そこで、本研究では、全国で20万人以上の人口があり、いくつもの集住地区がある在日ブラジル人に焦点を当て、その家庭の幼児を対象として、2言語環境で育つ幼児の言語発達、特に語彙の獲得について評価する方法を検討することを目的とした。特に、語彙獲得を取り上げる理由としては、幼児期の語彙量がその後の言語発達を予測する指標となる (Paradis, J. 2016) ことや、2歳時点の語彙獲得の遅さが後の文法の弱さやリテラシースキルに関係している (Lee, 2011; et al) といった先行研究があること、言語発達を評価する場合、語彙が代表的な指標として用いられること、また、文法が未発達な子どもでは語彙が言語発達の1つの指標とされることなどである。Uccelli (2007) によれば、バイリンガルの幼児の場合、特に理解語彙よりも表出語彙の方が就学後のリテラシーに影

響を及ぼすため表出語彙の把握を重要視している。そのため、本研究では、まず表出語彙の獲得に焦点を当てて検討する。

2言語環境で育つ幼児の語彙獲得の先行研究では、語彙獲得が遅れが生じることが多数報告されている。これらの研究の中には、現地語 (例えば、米国の場合、英語) でのみ評価した結果に基づいて言葉の遅れを指摘しているものもあり、子どもが潜在的に持っている言語力が適切に評価されない恐れがある。また、2言語による評価を行った研究においても、語彙獲得の初期に2言語ともに遅れが見られたり、就学前の語彙力が就学後の学習に影響を及ぼすことが指摘されたりしているため (August, et al, 2005; Oller, et al., 2007; Uccelli, 2007)、幼児期からの2言語による丁寧な評価の必要性が示唆されている (Pearson, et al., 1993; Bialystock, et al, 2010; Core, et al., 2015)。

バイリンガル児の語彙獲得を評価する1つの方法としては、Conceptual Vocabularyを算出するという方法が提案されており (Pearson et.al, 1993)、語彙力を測る有効な方法と言われている。これは、2言語でそれぞれ語彙検査を行った場合、少なくとも1言語で獲得していればその語彙は獲得されたものとみなすという方法である。この評価方法によると、子どもが潜在的にもっている語彙力を過小評価するという誤りを回避できるという考え方に基づいている (Allman, 2005; Mancilla-Martinez, et.al, 2011)。

本研究では、Conceptual Vocabularyの考え方を取り入れ、ブラジル人幼児の継承語であるポルトガル語ⁱⁱと日本語の2言語で語彙の評価を試み、2言語環境下で育つ子どもの言語力を把握する方法を検討するとともに、語彙獲得と環境要因との関連についても言及したい。

II. 方法

1. 研究協力者

研究協力者である幼児（以下、対象児）はブラジル人集住地域にある企業内保育所の在日ブラジル人の在園児17名（女児8名男児9名）であった。研究協力者の募集は当該保育所の所長を通して行った。対象児の年齢、性別、きょうだいの有無、父母の日本語レベル等の属性は表1に示した。

対象児全体の平均年齢（年齢範囲）は5歳9か月（4歳11か月～6歳10か月）であった。年

中、年長クラス別では、年中児10名の平均年齢は5歳3ヶ月（4歳11か月～5歳10ヶ月）、年長児7名の平均年齢は6歳7か月（5:11～6:10）であった。

対象児17名中14名は日本で生まれ育っており、3名はブラジルで出生後来日している（対象児12は4歳7か月時、対象児14は5歳3か月時に来日。対象児6は不明）。きょうだいがいるのは17名中10名だが、対象児7（弟）を除いては全て年上のきょうだいであった。事前に家族構成や社会経済状態についての質問紙調査（ポルトガル語）を行い、回答を得た7名の結果では、父親の最終学歴は大学院1名、高等学校5名、専門学校1名、母親の最終学歴は高等学校5名、専門学校1名、中学校1名であった。年収は、200～300万円が4名、300～500万円が3名とこの地域の年収区分で見ると総世帯の50%未満の区分に位置している。その他の家庭

表1. 対象児の属性

対象児#	所属クラス	性別	生活年齢	きょうだいの有無	父親の日本語レベル	母親の日本語レベル
1	年中	女児	4:10	有	不便がない	あまり話せない
2	年中	女児	4:10	有	あまり話せない	あまり話せない
3	年中	男児	5:2	有	日常会話程度	日常会話程度
4	年中	女児	5:2	有	不便がない	全く話せない
5	年中	男児	5:2	無	不便がない	あまり話せない
6	年中	男児	5:2	有（同居でない）	あまり話せない	全く話せない
7	年中	男児	5:4	有（弟）	不便がない	あまり話せない
8	年中	男児	5:5	有	全く話せない	全く話せない
9	年中	男児	5:8	有	あまり話せない	あまり話せない
10	年中	女児	5:8	有	あまり話せない	あまり話せない
11	年長	男児	6:1	有	日常会話程度	単語程度
12	年長	女児	6:5	無	不便がない	全く話せない
13	年長	女児	6:7	無	単語程度	単語程度
14	年長	女児	6:7	無	全く話せない	全く話せない
15	年長	男児	6:9	無	日常会話程度	全く話せない
16	年長	女児	6:9	無	日常会話程度	日常会話程度
17	年長	男児	6:10	無	全く使話せない	不便がない

についても、同様の労働条件の職場に勤めていることから経済的状态は同等だと考えられる。

17名中、Raven's Coloured Progressive Matrices（非言語的知能検査）（Raven, 1976）を実施できた12名については、知能レベルはポルトガルの一般標準値で60パーセントイル（中程度）が1名、70～80パーセントイル（中～上程度）が1名、80～90パーセントイル（上）が1名、90パーセントイル以上（優れている）が9名であった。実施できなかった5名についても保育者の報告では特に知的な遅れは見られなかった。

2. 言語環境

父母の日本語のレベルは表1のとおりであり、家庭での使用言語は全員ポルトガル語であった。年上のきょうだいは日本の公立学校で日本語による教育を受けていた。家庭での絵本の読み聞かせの頻度と言語について質問したところ、回答のあった7名中、家でほとんど絵本の読み聞かせをしていないと答えた親は4名、1週間に2度ほどポルトガル語で行うという親が3名であった。

保育所の在園児は、ほぼ全員がブラジルにルーツを持つ幼児である。対象児は全員年中・年長児の合同クラスに在籍していた。担当保育者は日本語話者2名とポルトガル語話者1名であった。保育は日本語で行われるが、年長児（対象児11～17）には、原則毎日1時間程度のポルトガル語の授業が行われ、ポルトガル語の語彙や文字、ブラジルの文化についての学習をしている。日本語については、通常の保育内容に加えてひらがなとカタカナの読み書きドリルを使って文字の指導を行っている。子ども同士の会話では、日本語が使われることもあるが、筆者の観察によるとポルトガル語による会話が優勢であった。

3. データ収集および分析方法

データ収集は、2018年3月および2019年2月

に行った。

ブラジルで使用されている表出語彙テスト（Teste de Vocabulário Expressivo）（Capovill, 2011）を実施した。表出語彙テストは、図版に描かれた具体物の絵を見せてその名称を問うもので100項目からなる。ポルトガル語の語彙テストはポルトガル語話者が実施し、同テストを日本語話者により日本語を用いて個別に実施した。日本語とポルトガル語の語彙テストの順番はカウンターバランスをとった上で、できるだけ別日に実施した。

結果の整理にあたっては、対象児にブラジルの標準値を当てはめることは適切ではないため（下井田, 2014）、表出語彙は100項目中の正答数で求めた。誤答/無回答数、日本語の正答数、ポルトガル語の正答数、少なくともどちらか一方で正答した項目数（日本語のみ正答、ポルトガル語のみ正答、2言語とも正答の合計）を Conceptual Vocabulary として算出した。

4. 倫理上の配慮

研究協力者（保護者）に研究の目的、個人情報に関する守秘義務等について書面（ポルトガル語訳付き）で説明し承諾を得た。なお、本研究は、共立女子大学・短期大学研究倫理審査委員会の許可をうけている。

Ⅲ. 結果

語彙テストの結果を図1に示した。

17名全員の語彙テストの誤答/無回答数（標準偏差）は、年中児29.4（12.08）、年長児13.7（7.36）と年長児の方が少なかった。

全員の正答数平均値（標準偏差）は、日本語の正答数39.7（12.36）、ポルトガル語の正答数69.9（21.04）、Conceptual Vocabulary77.1（12.95）であった。年中児10名について見ると、日本語の正答数38.7（11.57）、ポルトガル語の正答数61.2（20.33）、Conceptual Vocabulary70.6（12.08）であった。年長児7名では、日本語の正答数41.1（13.27）、ポルトガル語の正答数82.4（14.81）、

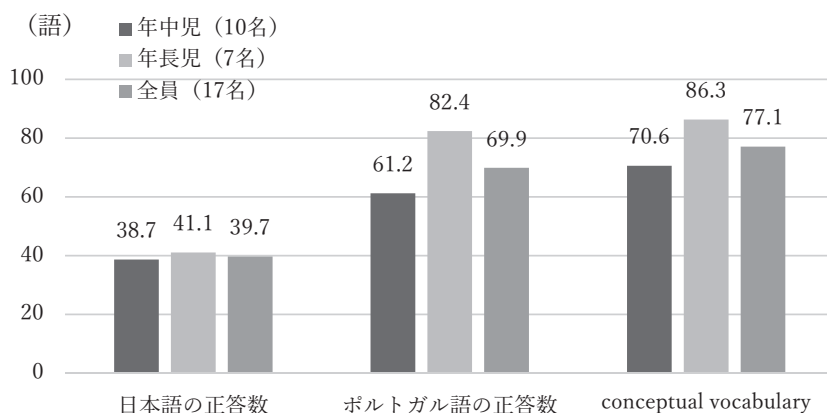


図1 各言語の正答数およびconceptual vocabulary (年中児・年長児・全員)

Conceptual Vocabulary 86.3 (7.36) であった。いずれも、Conceptual Vocabulary が最も平均値が高く、次いでポルトガル語、日本語の順であった。

正答数の範囲は、年中児の日本語は25～61、ポルトガル語は28～90、Conceptual Vocabulary は50～90であった。年長児は、日本語は24～65、ポルトガル語47～93、Conceptual Vocabulary は70～94であった。標準偏差、正答数の範囲をみても年中児、年長児ともに、個人差が大きかった。

次に、表出語彙獲得の特徴をさらに知るために、Conceptual Vocabulary を日本語のみの正答数、ポルトガル語のみの正答数、2言語ともに正答した数に分けて検討した。その結果を表2に示した。

17名全員の日本語のみの正答数平均値(標準偏差)は7.1 (9.11)、ポルトガル語のみの正答数は37.4 (19.69)、2言語ともに正答した数は32.6 (9.76) であった。これらを合計したものがConceptual Vocabulary だが、Conceptual Vocabulary を100%としたときのそれぞれが占める割合は、日本語のみの正答数が9.2%、ポルトガル語のみの正答数が48.5%、2言語ともに正答した数が42.3%と日本語のみの正答数が最も少なく、ポルトガル語のみの正答数と2言

語ともに正答した数はともに40%を超えていた。

さらに年中児と年長児別に見ると、年中児10名中、日本語のみの正答数が3以下の対象児は5名(0語が2名、1語が2名、3語が1名)、その他の対象児についても26が最大値、平均値が9.4 (9.23) という結果であり、「ポルトガル語では知らないが日本語では知っている」という単語は非常に少なかった。対照的に、ポルトガル語のみの正答数は、平均値が31.9 (18.53)、正答数の範囲もポルトガル語の正答数が6の1名(対象児3)を除いては12から59であり、「日本語では知らないがポルトガル語では知っている」という単語は比較的多いという結果であった。年長7名については、日本語のみの正答数23の1名(対象児11)を除いては、全員2語以下という結果であった。ポルトガル語のみの正答数は平均値45.1 (18.65) であり、正答数5の1名(対象児11)を除いては、正答数の幅は40から69と、「日本語では知らないがポルトガル語では知っている」という単語が年中児に比べてもかなり多い結果であった。

2言語ともに正答した数は年中児10名の平均値は29.3 (8.89)、年長児7名では、37.3 (8.99) と年長児の平均値が高かった。

ブラジルにルーツを持つ幼児の2言語による語彙発達評価の試み

表2 各対象児の日本語のみ、ポルトガル語のみ、2言語ともに正答した数

対象児#	所属クラス	PPVT100 日本語のみの 正答数	PPVT100 ポルトガル語のみの 正答数	2言語ともに 正答した数	合計 (conceptual vocabulary)
1	年中	15	17	37	69
2	年中	0	42	25	67
3	年中	26	6	23	55
4	年中	22	12	16	50
5	年中	1	45	40	86
6	年中	0	59	31	90
7	年中	3	50	25	78
8	年中	12	25	25	62
9	年中	1	51	24	76
10	年中	14	12	47	73
11	年長	23	5	42	70
12	年長	0	58	28	86
13	年長	2	53	34	89
14	年長	1	40	53	94
15	年長	1	46	38	85
16	年長	0	45	42	87
17	年長	0	69	24	93
平均値		7.1 (9.2%)	37.4 (48.5%)	32.6 (42.3%)	77.1 (100%)
標準偏差		9.11	19.69	9.76	12.95

IV. 考察

1. Conceptual Vocabularyによる語彙獲得の評価

本研究の測定値は標準値ではないため、この結果だけから対象児らが年齢にふさわしい語彙獲得をしているかどうかを判断することはできないが、「誤答/無回答」(日本語でもポルトガル語でも知らない語)数の平均値について、年長児が年中児よりも約16語少なかったのは、発達の差異だと考えられ、1年の違いによる表出語彙の伸びを見ることができた。

図1の結果から、全員の語彙テストの正答数平均値は、日本語よりもポルトガル語の方が約30語上回っており、全体的に見るとポルトガル語優位の傾向が強かった。Conceptual

Vocabularyは、当然ではあるが1言語による正答数よりも多い結果であった。このことから、先行研究(Allman,2005; Mancilla-Martinez,et. al, 2011)同様、幼児の表出語彙を評価する際には、1言語だけの評価に止まると語彙力を過小評価してしまうことが示されたと言える。2言語環境で育てている子どもの語彙力の評価をする際には、できる限り2言語による評価を試みる必要があると同時に、もし、2言語による評価が困難な場合には、下井田(2014)が指摘しているように日本語だけの語彙テスト等の結果は参考値として捉える必要があろう。

本研究の対象児の多くはポルトガル語優位であったため、ポルトガル語の正答数とConceptual Vocabularyとの差はそれほど大きくはなかった。このことから、一方の語彙力の優位性が非

常に高い場合には、Conceptual Vocabulary自体の意味がそれほどないとも言える。

また、Conceptual Vocabularyの前提としては、1つの語の概念が2言語においてほぼ同じであることが必要である。例えば、日本語で「見る」という語を英語で言おうとしたとき、“look”なのか“watch”なのか“see”なのか、あるいは他の語のほうが良いのかの判断は文脈によって変わってくる。このように2言語間で全く同じ概念を表している語はむしろ少ないのではないだろうか。特に形容詞や動詞のような抽象性の高い語では、具体物を表す名詞に比べてその可能性は大きいといえよう。そのため、バイリンガル児にConceptual Vocabularyを適用することについては注意が必要である。本研究の語彙検査の項目は、すべて具体物の名詞であったため、Conceptual Vocabularyを用いたことは妥当であったと考える。しかし、当該保育所幼児を対象として松井・須藤(2014)が行った研究では、概念形成、特に抽象概念の遅れが指摘されているため、今後、抽象性の高い語彙について検討するときには単純にConceptual Vocabularyを指標として用いることには慎重である必要がある。

2. 語彙獲得と環境要因との関連

次に、年中児と年長児のグループに分けて横断的に検討したところ、どちらも日本語よりポルトガル語の正答数が多く、Conceptual Vocabularyが最も多いという傾向に変わりはなかった。サンプル数が年中児10名、年長児7名と少ない点に限界はあるが、年中児に比べて年長児は日本語、ポルトガル語、Conceptual Vocabularyともに語彙数が伸びていることがわかる。しかし、年中児と年長児のポルトガル語の差(年中児:61.2、年長児:82.4)に比べて、日本語の差(年中児:38.7、年長児:41.1)は大きくない。この理由として2点考えられる。

まず第1に、年長児に対するポルトガル語環境の変化がある。当該保育所では、年長児に対

してブラジル人教師による継承語の授業を毎日原則1時間実施している。教師が準備した教材を通してポルトガル語の新しい語彙に触れている効果が表れている可能性がある。

2点目の理由として、きょうだい構成の違いが考えられる。偶然ではあるが、本研究の年中児は10人全員きょうだいがおり、内8人が年上のきょうだいが同居している。対照的に年長児7人中きょうだいがいるのは1名のみである。家庭内で継承語を使っている場合、きょうだいの有無や出生順位は現地語の習得に大きく影響する(権藤他, 2015)。特に就学した年上のきょうだいがいる場合は、きょうだいが習得した日本語の影響を受けやすいため、年上のきょうだいのいない年長児は日本語の習得がポルトガル語に比べて伸びていない可能性がある。

語彙の習得は環境からの言語入力量と質によるところが大きい(Thordardottir, 2011)、今回の結果には発達的な差に加えて、ポルトガル語の授業や日本語が話せるきょうだいの有無と言った環境からの言語入力の影響が考えられる。

Pearson(2007)は、子どもが2言語を習得するための条件の1つとしてリテラシーへのアクセスを挙げている。リテラシーへのアクセスとは文字の読み書きだけでなく読むこと書くことに関する社会的な活動、たとえば、家庭での読み聞かせ、親の読書習慣、図書館の利用等々などを含めた広義の概念と捉えられる。本研究では、十分に調査はできていないが、家庭での絵本の読み聞かせについての質問を行った結果、家庭では読み聞かせがほとんどなされていない状況が垣間見られた。当該保育所では、毎週、巡回図書館を利用して1人1冊の絵本の貸し出しをしている。しかし、日本語で書かれた絵本のため家庭で読み聞かせられず有効に活用されていないことが推察される。日本語のかな文字のドリル学習についても文字を書くという練習ではあるが、語彙獲得につながっているかどうかは不明であり、リテラシーへのアクセス

についてはさらに検討が必要である。

3. 語彙獲得過程の個人差について

本研究における対象児の語彙獲得の特徴をさらに検討するために、日本語のみの正答数、ポルトガル語のみの正答数、2言語ともに正答した数という3つのカテゴリーについて調べ、Conceptual Vocabularyに占める割合を検討した(表2)。その結果、日本語のみの正答数、つまり日本語では知っているがポルトガル語では知らないという割合が最も少なく(9.2%)、対照的に、ポルトガル語では知っているが日本語では知らないという割合(48.5%)と、どちらの言語でも知っているという割合(42.3%)がともに40%以上を占めていた。この結果から、全体的な傾向として、本研究の対象児は、新出語彙を学習する際に、まず、継承語であるポルトガル語で獲得し、その後、それに対する日本語の語彙を学習するという第2言語習得の方略を取っているのではないかと推察される。

さらに個人差を詳しく見ると、対象児3と対象児11については、日本語のみの正答数の方が圧倒的に多く、日本語優位の傾向を示していた。この2名の共通の環境要因としては、年長のきょうだいがおり、両親の日本語が日常会話(1名は単語)レベルであるということが考えられる。また、対象児1, 4, 8, 10の4名については、一方の言語への極端な偏りはみられなかった。この4名も年上のきょうだいのいる幼児だが、母親の日本語力が低いという特徴が見られた。ポルトガル語がやや優位ではあるものの、日本語から習得している新しい語彙もある。日米バイリンガル児の語彙獲得の研究において、学齢期のきょうだい児の存在が家庭での英語使用の増加につながっていることが報告されている(柳澤他, 2013; 権藤他, 2015)こと、親の日本語力と子どもの日本語力の関連も指摘されている(須藤・松井, 2014)ことから、きょうだい児の存在と親の日本語力が影響している可能性はある。

次に、来日時の年齢について検討する。対象児6, 12, 14はブラジル生まれであり、対象児6については来日年齢が不明だが、対象児12は4歳7か月まで、対象児14は5歳3か月までブラジルで育ったことからポルトガル語がある程度母語として定着した後に日本語を第2言語として学習している継続バイリンガルだといえる。3名のConceptual Vocabularyは全体の中でも上位に位置していることから、4, 5歳までに培った母語としてのポルトガル語が日本語の獲得を支えていると考えられる。この3名以外の14名の対象児は日本生まれのため、出生時から2言語習得を開始する同時バイリンガルとしての言語発達をしているように見える。しかし、言語環境を精査すると、家庭の言語がポルトガル語であり、保育所では2言語による保育が行われているため言語入力がポルトガル語に偏っていることがわかる。そのため、継承語であるポルトガル語を拠り所として、日本語の語彙を習得するという継続バイリンガルに近い語彙獲得の過程がみられたのではないだろうか。

このように2言語環境下で育っている幼児の中には、現地語である日本語を基盤として継承語であるポルトガル語を習得している幼児(対象児3, 11)、継承語を手掛かりとして日本語を習得している幼児(対象児2, 5, 7, 9, 13, 15, 16, 17)、母語であるポルトガル語の基盤の上に日本語を第2言語として習得している幼児(対象児6, 12, 14)、それぞれの言語から新しい語彙を獲得している幼児(対象児1, 4, 8, 10)など語彙獲得の過程が異なる幼児がいることが、言語環境や2言語による語彙テストの結果を精査することにより明らかになった。

V. 結論および今後の課題

本研究では、在日ブラジル人幼児の表出語彙に焦点を当てて、Conceptual Vocabularyの考え方を取り入れた2言語による評価方法について検討した。その結果、2言語による語彙獲得

の評価の重要性を確認できた。また、Conceptual Vocabularyという評価の指標の有効性と限界についても整理することができた。さらに、言語環境要因も合わせながら個人差を検討することで、2言語環境下で育っている幼児の語彙獲得の過程は一樣ではないことが示唆された。

今後は、理解語彙の検討に加えて、文法やナラティブの理解・表出などを含む言語発達の諸側面についても2言語による評価の方法を検討する必要がある。また、本研究では不十分であった、親や保育者のことばかけの質や量と言語発達との関連についての検討も必要である。

注

- i) 継承語とは、現地の言葉ではない、親や祖父母などから習得する言語を指す。
- ii) 本研究のポルトガル語はブラジルで用いられているポルトガル語を指す。

付記

本研究の一部は日本保育学会第73回日本保育学会および第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会において発表した。本研究は、JSPS科研費基盤研究(B) 課題番号17H02718(研究代表者 権藤桂子)の助成を受けた。

文献

Allman, B.(2005) Vocabulary Size and Accuracy of Monolingual and Bilingual Preschool Children, ISB4: Preceedings of the 4th International Symposium on Bilingualism, (Ed.) Cohen,J. & McAlister, K.T. Rolstad,K. & MacSwan,J. 58-77. Somerville, MA: Cascadilla Press.

August,D., Carlo,M., Dressler,C.,& Snow,C.E. (2005) The critical role of vocabulary development for English language learners, Learning Disabilities Research and Practice, 20(1), 50-57.

Bialystock,E., Luk,G., Peets,K.F. & Yang, S.

2010 Receptive vocabulary differences in monolingual and bilingual children, Bilingualism: Language and Cognition, 13(4), 525-531.

Capovill, F.C., Negrao, V.B., & Damazio, M. 2011 Teste De Vocabulario Auditivo e Teste De Vocabulario Expressivo, MEMNON.

Core,C., Hoff,E., Rumiche,R., and Melissa,S. 2013 Total and Conceptual Vocabulary in Spanish-English Bilinguals From 22 to 30 Months: Implications and Assessment, Journal of Speech Language and Hearing Research, 56(5), 1637-1649.

e-Stat, <https://www.e-stat.go.jp/stat-search>, (2020年3月12日閲覧)

権藤桂子・稲田素子・松井智子 (2015) 日英2言語環境下で育つ児童の語彙力と文法力に関する一考察－米国A地域の日本語補習校低学年時を対象として－, 国際教育評論, 12, 1-17.

Lee, J. (2011) Size Matter: Early vocabulary as a predictor of language and literacy competence, Applied Psycholinguistics, 32(1), 69-92.

Mancilla-Martinez,J., Pan,B.A. & Vagh,S.B. (2011) Assessing the productive vocabulary of Spanish-English bilingual toddlers from low-income families, Applied Psycholinguistics, 32, 333-357.

松井智子・須藤美緒子 (2014) 日本における言語的マイノリティ幼児の言語と社会性の発達, コミュニケーション障害学, 31 (2) , 90-101.

Oller DK, Pearson BZ, Cobo-Lewis AB. (2007) Profile effects in early bilingual language and literacy. Applied Psycholinguistics;28(2), 191-230.

Paradis, J., Tulpar, Y. & Arppe, A. (2016). Chinese L1 children's English L2 Long-term outcomes in English as a Second Language verb morphology over time: Individual variation in long-term outcomes. Journal of

- Child Language. Advance online publication.
doi: 10.1017/S0305000915000562
- Pearson, B.Z., Fernandes, S.C., and Oller, D.K.
1993 Lexical development in bilingual infants
and toddlers: Comparison to monolingual
norms, *Language Learning*, 43, 98-120.
- Pearson, B.Z. (2007) Social factors in childhood
bilingualism in the United States, *Applied
Psycholinguistics*, 28, 399-410.
- Raven,j.c. 1976 Raven's Coloured Progressive
Matrices, Pearson
- 下井田恵子 2014 カリフォルニア州における
多文化多言語児童への言語評価:現状と課題,
コミュニケーション障害学, 31 (2) , 112-119.
- Thordardottir(2011) The relationship between
bilingual exposure and vocabulary
development, *The International Journal of
Bilingualism*, 15(4), 426-445.
- Uccelli, P. & Paez, M.M. 2007 Narrative and
Vocabulary Development of Bilingual
Children from Kindergarten to First Grade:
Developmental Changes and Associations
Among English and Spanish Skills, *Language
Speech Hearing Service in School*, 38(3), 225-
236.
- 柳澤りょう・権藤桂子・松井智子・大井学 (2013)
日英2言語環境下で育つ児童の語彙発達, *国
際教育評論*, 10, 19-34.
- 謝辞** : ご協力いただきました園児の皆さんとご
家族、保育所の皆さんに感謝申し上げます。ま
た、ポルトガル語のテストを実施してくださ
った稲岡プレイアデス千春さんに御礼申し上げま
す。